



鶏 けいめい 鳴

2007年12月9日(第8号)

イエスの言葉

『わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない』

聖書(ヨハネ福音書6章35節)

牧師 河合裕志

皆さんはパン、好きだろうか。朝食はパンと決めている人がいる。私などは朝はお米のご飯がいい。パンであれ米飯であれ1日3度3度食事をしないことには力が出ない。中には1日2度、という人もいるがとに角食べないことには体力の維持がはかれない。

ところで今イエスは『わたしが命のパンである』とヘンなことを言っている。「わたしが命のパンだからわたしを食べてください。そうすれば決して飢えることはありませんよ」と。これは一体どんなパンのことを言ったものか。パンは私達の肉体に摂取して行くものだがどうもイエスのパンはそうではないらしい。一体に決して飢えることにならないような魔法のパンはこの世には存在しない。そんなものがあれば汗水流して働くことはなくなるというものだ。

イエスの言う命のパンとはイエスの体のようだ。イエスはあとの方でこう言った。『わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は永遠の命を得る』(54節)。これは過激な言葉。食肉人種じゃあるまいし一体誰がイエスの肉を食べ血を飲むことができるか。実際この言葉に大勢の人々がつまづきイエスの元を離れ去った。

皆さんはダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の絵をご存知だろうか。あれは翌日には十字

架につけられることを覚悟したイエスが12弟子と共に最後の食事をとった場面を絵にしたものだ。あの時イエスはパンを取り上げちぎって、「これはあなたがたのために与えられるわたしの体」と言って弟子達に与え、次にブドウ酒の杯を取り上げて「これは罪が赦されるように多くの人のために流されるわたしの血」と言って回し飲みをさせた。以来教会は2千年の間、イエスの十字架による犠牲死を絶対に忘れてはならじと最後の晩餐を礼拝の中に入れてパンとブドウ酒を頂く儀式を行って来ている。

パンもブドウ酒もどこかで買って来た物に違いないがしかし私達は「これはわたしの体」「わたしの血」と言ったイエスの言葉を信じてイエスの血肉としてこれを頂く。頂く程に今も復活して生きているイエスが私の胃袋の中にはなく心の中に宿る。『わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はいつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる』(56節)と更に述べている通りに。イエスをわが内に宿しイエスと共に生きることこそが決して飢えることがない永遠の命を生きること、常に希望を与えられて生きて行くことなのである。

集会案内

主日礼拝：毎日曜日	午前10時15分
こどもの教会：毎日曜日	午前9時
婦人会・壮年会：第2日曜日	礼拝後
聖書を学ぶ集い：第4水曜日	午前10時
オリーブの会：第3月曜日	午前10時

(読書会を中心に身近な問題を話し合っています。)